DOI https://DOI.org/10.21481/jbunka..80.201902.257.

安部公房、その政治性の変遷

― 『安部公房全集』全30巻におけるアナキズム関連用例データベース作成とその分析 ―

大場健司*

(e-mail : kenji.oba.kyushu.university@gmail.com)

<목 차>

1. はじめに
2. 共産主義とナショナリズム
3. アナキズム関連用例分析
3.1. 1940-1950年代における「満洲」表象と「無政府」
3.2. 1960-1970年代の高度経済成長期における「都市空間」と「学生運動」
3.3. 1980年代のバブル経済期における「カタストロフ」と「国家」
4. おわりに

キーワード : 安部公房研究 (Abe Kōbō Studies) 、共産主義 (Communism) 、ナショナリズム (Nationalism) 、アナキズム (Anarchism) 、政治 (Politics)

1. はじめに

近年の安部公房 (1924-1993年) 研究では、『砂の女』 (新潮社、1962年6月)までの作品が当時の芸術運動から論じられ、それ以後の作品が映画や演劇といった他のメディアとの関連で論じられていると言ってもよい。このことは、1962年2月7日に安部が日本共産党から除名されるまでの作品を政治的に、それ以後の作品を芸術的、すなわち非政治的に論じることと同義である。そこで前景化されるのは、安部が日本共産党員であったということである。このような先行研究による作家像の規定では、まるで安部が日本共産党除名後には政治に無関心であったかのよ

www.kci.go.kr

* 台灣・國立國防大學語文中心 專任教師 比較文学、日本近現代文学

うに論じられてしまうのだ。

しかしながら、戦後の日本近現代文学において、完全に非政治的であることは不可能であろう。現に、このような作家像を否定すべく、安部がナショナリズム（nationalism）に対する批判を一貫して行ってきたとする研究も行われてきたのである。ここで注目すべきなのは、1960年代後半、学生運動が活発化する中で、『内なる辺境』（中央公論社、1971年11月）所収エッセイなどでアナキズム（anarchism）を提示していたことである。このことは、日本共産党除名後の安部が共産主義には還元不可能な政治思想としてアナキズムを主張していたということである。

以上のような観点から、本研究では、安部が実際に「アナキズム」や「アナーキズム」、「アナーキー」（anarchy）、「無政府主義」、「無政府」といった言葉をどのように用いてきたかを分析するため、『安部公房全集』全30巻（新潮社、1997年7月-2009年3月）から全用例を採取し、データベース化した。本論文では、従来の研究を刷新し、今後の安部公房研究の視野を広げるためにも、その分析結果を示すことで、安部の政治性の変遷の一例を明らかにしたい。

2. 共産主義とナショナリズム

本章では、近年の安部公房研究において、安部がいかに論じられ、研究対象とされてきたかを概論する。近年の安部公房研究には、大きく分けて3つのタイプがあると言っても良い。それは【1】芸術運動論、【2】ポストコロニアリズム（post-colonialism）、【3】メディア研究（media studies）の3種類である。

まず、【1】芸術運動論では、主に1950年代の芸術運動が政治的に論じられている。代表的な研究書としては鳥羽耕史『運動体・安部公房』（一葉社、2007年5月）や坂堅太『安部公房と「日本」――植民地 / 占領経験とナショナリズム』（和泉書院、2016年10月）を挙げることができるだろう。

そして、【2】ポストコロニアリズムでは、安部が幼少期に過ごした満洲など東アジアの視座から植民地の問題などが論じられている。代表的な研究書には、波潟剛『越境のアヴァンギャルド』（NTT出版、2005年7月）や呉美妊『安部公房の〈戦

www.kci.go.kr

後〉――植民地経験と初期テクストをめぐって』（クレイン、2009年11月）がある。

次に、【3】メディア研究では、安部が1960年代以降、小説のみならず映画や演劇、テレビドラマ、ラジオドラマの制作に着手していたことに注目し、他メディアとの関連で安部の作品が論じられている。代表的な研究書には、友田義行『戦後前衛映画と文学――安部公房×勅使河原宏』（人文書院、2012年2月）や木村陽子『安部公房とはだれか』（笠間書院、2013年5月）、鳥羽耕史編『安部公房 メディアの越境者』（森話社、2013年12月）がある。

以上のような先行研究、特に【1】芸術運動論のタイプの研究において顕著なのは、『砂の女』（新潮社、1962年6月）までの作品が主に論じられていることだと言ってもよい。例えば、鳥羽耕史『運動体・安部公房』においては、主に1950年代から『砂の女』までの作品が扱われ、「マルクス主義の高揚と日本共産党の武力革命路線の中にあって、安部の運動体は政治的な革命を目指す方向に再編成された」とあり[1]、『砂の女』が「アメリカや日本共産党との関係という、一九五〇年代の安部がもっていた政治的問題意識の総決算となる小説」として位置付けられ、「運動体・安部公房の終着点とも言える小説」として扱われている[2]。すなわち、この「運動体」という言葉は、日本共産党員としての安部の「政治運動」＝「芸術運動」を指したものとして用いられているのである。鳥羽による研究は、これまで国際的な作家として見なされてきた安部の作家像を見直し、それをローカルな視点から捉え直したという点で評価できるだろう。しかし、同時に安部の政治思想を共産主義に限定してしまっていると言ってもよい。

同様の傾向が散見されるのが、坂堅太『安部公房と「日本」――植民地／占領経験とナショナリズム』である。この研究書では、1950年代の安部が日本共産党所感派に所属していたことから、安部の1950年代の政治性が所感派の反米ナショナリズムにもとづいて論じられている。第二次世界大戦（World War II, 1939-1945）の終戦後、日本にはアメリカの占領軍が駐留していたこともあり、1950年代の日本では「反植民地主義、反帝国主義的ナショナリズム」が高まりを見せる[3]。このよ

1) 鳥羽耕史（2007）「プロローグ」『運動体・安部公房』一葉社、p. 6.

2) 鳥羽耕史（2007）「視覚の手触りへ――『砂の女』1962」『運動体・安部公房』一葉社、pp. 278–279.

3) 坂堅太（2016）「「複雑」なナショナリズム――「国民文学」を巡る問題」『安部公房と

www.kci.go.kr

うな反米ナショナリズムの観点から、1950年代の安部の作品を論じたのが、坂による先行研究であった。しかし、この研究においても、1960年代の安部が反ナショナリズムに向かったことが無視されており、安部の政治性が共産主義とナショナリズムに還元されてしまっているのだ。

このように、1950年代から1962年までの作品は共産主義やナショナリズムから論じられる傾向があるのだが、それ以降の作品については、逆に非政治的に論じられる傾向があると言ってもよい。例えば、木村陽子『安部公房とはだれか』では、1962年7月に日本共産党から除名を受けた安部にとっては、それが契機となって、「左翼思想の呪縛からも解き放たれ、より自由な発想が取れるようになった安部にとって、〈政治的メッセージ〉も、大衆の意識改造や量的支持も、もはや主たる関心事ではなくなっていった」という[4]。このような経緯から、『安部公房とはだれか』では、安部のマルチメディア演劇などが論じられている。しかし、1960年代後半に安部が『内なる辺境』所収エッセイなどでアナキズムを提示している点で、実際に安部が「左翼思想」から離れたとは言えないのではあるまいか[5]。

近年の先行研究では、リチャード・F・カリチマン（Richard F. Calichman）による*Beyond Nation: Time, Writing, and Community in the Work of Abe Kōbō* (2016)など、安部のネーション（nation）批判に注目した新たな研究も登場しているのであり、安部の政治性を共産主義とナショナリズムに限定せずに論じていく必要があるだろう。

3. アナキズム関連用例分析

3.1. 1940-1950年代における「満洲」表象と「無政府」

「日本」――植民地／占領経験とナショナリズム』和泉書院、p. 30.

4) 木村陽子（2013）「マルチメディア演劇への道」『安部公房とはだれか』笠間書院、p. 104.

5) 例えば、拙稿「進化論・異端・アナキズム――安部公房「異端のパスポート」とスタンリー・キューブリック『2001年宇宙の旅』――」（松本常彦、波潟剛編『近現代文学と東アジア―教育と研究の多様性に向けて』花書院、2016年3月）では、安部公房『内なる辺境』所収のエッセイ「異端のパスポート」（『中央公論』1968年9月号）において、安部が「人類の起源にまで遡行し、国境を破壊する遊牧民の移動性」をアナキズムとして提示していたことを論じている（p. 221）。

本研究では、安部が「アナキズム」や「アナーキズム」、「アナーキー」、「無政府」、「無政府主義」といった言葉をいかに用いていたのかをデータベース化し、その用例を分析することで、安部のアナキズム理解、及びその変遷を解明することにする。本章では、用例が見つかった小説やエッセイ、対談、インタビュー、座談会などの書誌情報、及びその用例を集めた表を作成した。また、各書誌情報に番号を付している。そして、その用例の分析を行うことで、安部のアナキズム理解の変遷を論じていく。

〈表1〉アナキズム関連書誌情報

年代	書誌情報
1948	①上野光平、小林明、関根弘、中田耕治、中野康雄、宮本治、安部公房「二十代座談会 世紀の課題について」（『綜合文化』1948年8月号） 「ぼくは終戦後満洲にいたんですが、完全な無政府で、強盗や人殺しが日中大通りでヒンピンと起き、しかも抵抗ができない。」[6]
1949	②安部公房「芸術を大衆の手へ」（『読売新聞』1949年2月21日付） 「もっとも、フォーヴィズムの美学をアナーキイに取入れたモダニストが割に少かったのは気持よかった。」[7]
1954	③安部公房「地図の地図――二十世紀文学の潮流」（『現在』1954年4月25日号） 「未来派、表現派、抽象派、超現実派、等々……これら芸術左派を、政治主義的評論家諸君は、一把ひとからげに帝国主義的タイハイの産物、近代主義者共とよぶのだが……そしてむろん彼らが小市民的無政府主義思想の持主であったことは、言うまでもないことだが……」[8]

6) 上野光平、小林明、関根弘他（1997）「二十代座談会 世紀の課題について」『安部公房全集』第2巻、新潮社、p. 66.

7) 安部公房（1997）「芸術を大衆の手へ」『安部公房全集』第2巻、新潮社、p. 203.

8) 安部公房（1997）「地図の地図――二十世紀文学の潮流」『安部公房全集』第4巻、新潮社、p. 287.

www.kci.go.jp

1956	④安部公房「チェコ作家大会に出席して」（『東京新聞』1956年7月3-5日付夕刊） 「現在副首相の一人であるゾデェニェク・フィールリングルが全体として討論にアナーキーな傾向があることを批判、個人崇拝はすべて人間の内部の誤りであると言い、しかし作家の発言はあくまでも自由でなければならぬことをつけ足す。」[9]
	⑤安部公房「最近の外国演劇を語る──チェッコ・ルーマニア」（『新劇』1956年11月号） 「（スタニスラフスキー・システムが強調されなければならぬわけだと、つくづく思った次第である。日本の新劇は、もっとずっと自由であり、むしろ自由すぎてアナーキーなのだから、同システムもよほど批判的接種をするのでなければ、意味がない。むしろ逆効果になるだろう）」[10]
1957	⑥安部公房「道──トラックとともに六〇〇キロ」（『総合』1957年9月号） 「しかし、個別資本の要求というものは、本来エゴイスティックでアナーキーなものだ。」[11]
1958	⑦安部公房「無邪気なもの」（『群像』1958年7月号） 「けっきょくこれらのモンタージュもジャーナリスティックな常識の貼り合わせを、一歩も出ていなかったように思われるのである。その理由は、関係者も述べているように、時間の不足も、あっただろうし、多分それ以上に、集団制作ということをあまりにもアナーキーに考えすぎていた点がわざわいしていたように思う。」[12]

9) 安部公房（1998）『東欧を行く──ハンガリア問題の背景』『安部公房全集』第7巻、新潮社、p. 65.

10) 前掲注9, p. 73.

11) 安部公房（1998）「道──トラックとともに六〇〇キロ」『安部公房全集』第7巻、新潮社、p. 371.

12) 安部公房（1998）『裁かれる記録──映画芸術論』『安部公房全集』第8巻、新潮社、p. 132.

www.kci.go.kr

	⑧安部公房、佐々木基一「良識による共犯」（『図書新聞』1958年11月1日付） 「つまり、アナーキーなデモクラシーで訴えても、僕は大衆の良識の壁、タブーの壁は非常に強いもんだと思うんですよ。」[13]
1959	⑨平野謙、大江健三郎、石原慎太郎、松本清張、安部公房、椎名麟三「文学者と政治的状況」（『文学界』1959年1月号） 「アナーキズムと文学はわりに結びつきやすいものでしょう。」[14]
1960	⑩安部公房「年譜」（『新鋭文学叢書2 安部公房集』筑摩書房、1960年12月） 「八月になって、急に戦争がおわった。ふいに、世界が光につつまれ、あらゆる可能性が一時にやって来たように思った。だが、つづいて、過酷な無政府状態がやってきた。しかしその無政府状態は、不安と恐怖の反面、ある夢を私にうえつけたこともまた事実である。父と、父に代表される財産や義務からの解放。階級や、人種差別の崩壊……」[15]
1961	⑪安部公房、川添登、菊竹清訓、田辺員人、丹下健三「新しい都市像を求めて」（『中央公論』1961年1月号） 「市民の要求というものは、たしかに微視的すぎる。それには、相対的な構想力が欠けている。だからと言って、市民の主体的参加なしに、都市の再編成が出来るわけがない。資本のエゴイズムが別のアナーキズムを生みだすだけでしょう。」[16]

13) 安部公房、佐々木基一（1998）「良識による共犯」『安部公房全集』第9巻、新潮社p. 339.

14) 平野謙、大江健三郎、安部公房他（2000）「文学者と政治的状況」『安部公房全集』第29巻、新潮社、p. 518.

15) 安部公房（1998）「年譜――『新鋭文学叢書』に寄せて」『安部公房全集』第12巻、新潮社、p. 465.

16) 安部公房、川添登、菊竹清訓他（1998）「新しい都市像を求めて」（『安部公房全集』第15巻、新潮社、p. 20.

www.kci.go.kr

1964	⑫安部公房『他人の顔』（講談社、1964年9月） 「国家が、仮面を、秩序に反する悪とみなしたというよりも、あんがい、国家自体が一つの巨大な仮面であり、内部に別な仮面が重複することを拒んだだけのことだったのではあるまいか。すると、世界でいちばん無害なのは、無政府主義者だということになるわけだが……」17)
1967	⑬安部公房「国家からの失踪」（『日本読書新聞』1967年11月20日付） 「また敗戦後の無政府状態を、ムチャクチャだったという人がいますが、実際はちがったな。これは悪い政府が入ってきた時にそうなるんで、都市というものは、日常的には平和そのものなんで、店はやっているし商品は売っているし自主性というのは貫かれていたと思うんだ。」18)
1968	⑭安部公房、野坂昭如「無思想の逃亡者と実存的共和国」（『映画芸術』1968年2月号） 「ひどい目って、そりゃあなた無政府状態になるんだから、こりゃ誰だってひどい目に合うんだ。ソ連軍がとくにひどい事したっていうのは嘘ね。一番残酷な仕打ちをしたのは日本人どうし。」19)
	「完全に無政府状態。つまりいないわけ、軍隊とか警察が。その期間が一番平和なんだ。」20)
1969	⑮安部公房、針生一郎「ゴダールの可能性は何か」（『映画芸術』1969年3月号） 「だから一般に紅衛兵をある種のアナーキーな拡散のように取る人がいるわけだけど、それは逆なんだ。」21)

17) 安部公房（1999）『他人の顔［講談社版］』『安部公房全集』第18巻、新潮社、p. 441.

18) 安部公房（1999）「国家からの失踪」『安部公房全集』第21巻、新潮社、p. 427.

19) 安部公房、野坂昭如（1999）「無思想の逃亡者と実存的共和国」『安部公房全集』第22巻、新潮社、p. 11.

20) 前掲注19，p. 14.

21) 安部公房、針生一郎（1999）「ゴダールの可能性は何か」『安部公房全集』第22巻、新潮社、p. 262.

www.kci.go.kr

	⑯安部公房「根なし草の文学」（『波』1969年9・10月号） 「ただ、いまの学生運動にはアナーキズムと結びつきやすい、反体制というよりむしろ反国家的な、日本人であることを拒否するという姿勢がある。」[22]
1978	⑰安部公房「都市への回路」（『海』1978年4月号） 「完全な無政府状態だった。しかし無政府状態、かならずしも無秩序なわけではないんだ。振り返ってみてよくわかる。」[23] 「あの完全な無政府状態のときも、まるで今日のように平和だった。」[24]
1980	⑱安部公房「〈安部公房が若者に与える〝予感的〟メッセージ〉」（『週刊プレイボーイ』1980年2月26日号） 「ぼくなんかの青春も、かなり反抗的で、メチャクチャなものだったな。特に管理が行き届いていた時代だから、どうしてもアナーキーで個人的なものになる。」[25]
1986	⑲安部公房「反教育論――'86東京国際円卓会議基調報告」（国際平和記念'86東京国際円卓会議、於・東京：経団連会館国際会議場、1986年9月25日） 「僕はいま、心理的というより、思想的にアナーキズムとニヒリズムの間を揺れ動いている状態なもので、ほとんど言うことに確信がまだないのです。希望がないのです。」[26]

1988	⑳安部公房「弔辞――石川淳」（『すばる 臨時増刊石川淳追悼記念号』1988年4月）

22) 安部公房（1999）「根なし草の文学」『安部公房全集』第22巻、新潮社、p. 355.

23) 安部公房（1999）「都市への回路」『安部公房全集』第26巻、新潮社、p. 224.

24) 前掲注23, p. 226.

25) 安部公房（2000）「〈安部公房が若者に与える〝予感的〟メッセージ〉」『安部公房全集』第27巻、新潮社p. 41.

26) 安部公房（2000）「反教育論――'86東京国際円卓会議基調報告」『安部公房全集』第28巻、新潮社、p. 317.

www.kci.go.kr

	「もっともぼくと石川さんの間に現象的な共通項はあまりないかもしれません。（中略）しかしもっと根本的なところでは、相通ずるものがあったように思うのです。たぶん生来のアナーキストだという点でしょう。」[27]
	㉑安部公房「石川淳の編上靴」（『新潮』1988年5月号） 「石川さんは、たぶん、正確な意味でのアナーキストだったのだと思う。」[28]
1991	㉒安部公房「〈歴史に学ぶべからず〉」（『エスクァイア　日本版』1991年11月号） 「（引用者注：榎本武揚は）今風に言えば、胡散臭いアナーキストかな。」[29]
1992	㉓安部公房「文学世界にテーマはいらない」（『日本経済新聞』1992年1月25日付） 「僕も青年のころ、満州（中国東北部）の奉天で、国家のメカニズムが崩壊し、無政府状態になったのを体験した。」[30]

安部公房が最初に「無政府」という言葉を用いるのは、①座談会「二十代座談会世紀の課題について」（『綜合文化』1948年8月号）においてであり、敗戦後の満洲が「無政府」であったことが否定的な意味合いで次のように述べられている。

> 安部　ぼくは終戦後満洲にいたんですが、完全な無政府で、強盗や人殺しが日中大通りでヒンピンと起き、しかも抵抗ができない。組織もない。個人にとって最悪の状態だったと思う。[31]

---

27) 安部公房（2000）「弔辞――石川淳」『安部公房全集』第28巻、新潮社、p. 378.
28) 安部公房（2000）「石川淳の編上靴」『安部公房全集』第28巻、新潮社、p. 383.
29) 安部公房（2000）「〈歴史に学ぶべからず〉」『安部公房全集』第29巻、新潮社、p. 204.
30) 安部公房（2000）「文学作品にテーマはいらない」『安部公房全集』第29巻、新潮社、p. 246.

「アナーキー」（anarchy）という言葉には、アナキズムで用いられる政治的な「無政府状態」という意味と、「政治的な秩序が失われて混乱した状態」としての「無秩序」という二つの意味がある[32]。②安部公房「芸術を大衆の手へ」（『読売新聞』1949年2月21日付）や④安部公房「チェコ作家大会に出席して」（『東京新聞』1956年7月3-5日付夕刊）、⑤安部公房「最近の外国演劇を語る――チェッコ・ルーマニア」（『新劇』1956年11月号）、⑦安部公房「無邪気なもの」（『群像』一1958年7月号）では「無秩序」の意味で「アナーキー」という言葉が用いられている。

③安部公房「地図の地図――二十世紀文学の潮流」（『現在』1954年4月25日号）では、「無政府主義」という言葉が、マルクス主義との対比で「小市民的無政府主義思想」として定義されているが、未来派やシュールレアリズムを肯定する文脈で用いられている[33]。

しかし、⑥安部公房「道――トラックとともに六〇〇キロ」（『総合』1957年9月号）では「個別資本の要求というものは、本来エゴイスティックでアナーキーなものだ」と、「無秩序」な資本主義を指して否定的に用いられている[34]。

⑧安部公房・佐々木基一「良識による共犯」（『図書新聞』1958年11月1日付）では、日本共産党の戦術としては、「アナーキーなデモクラシー」という「目的」を達成するためには、それを達成するための「手段」として「戦術」が必要であることが示されている[35]。

3.2. 1960-1970年代の高度経済成長期における「都市空間」と「学生運動」

1960年代に入ると、これまで否定的に述べられてきた敗戦後の満洲における

31) 前掲注6、p. 66.

32) 「アナーキー」（『日本国語大辞典 第二版』小学館、2000年12月-2002年1月）http://japanknowledge.com.anywhere.lib.kyushu-u.ac.jp/library/（2017年7月20日閲覧）

33) 前掲注8, p. 287.

34) 前掲注10, p. 371.

35) 前掲注13, p. 339.

www.kci.go.kr

「無政府状態」への評価が変わってくる。例えば、⑨座談会「文学者と政治的状況」（『文学界』1959年1月号）は、雑誌『近代文学』同人の平野謙（1907-1978年）や、当時、「若い日本の会」のメンバーであった大江健三郎（1935年-）、石原慎太郎（1932年-）、そして松本清張（1909-1992年）や椎名麟三（1911-197年）と共に行われたものであった。この座談会では、前年（1958年）に岸信介（1986-1987年）内閣が警察官職務執行法改正を試みたことが批判されており、安部も「記録芸術の会」のメンバーとして平野から意見を求められている。平野が「日本のアナーキズムの運動というものは、不当に埋没している」とし、「アナーキズムと文学の結びつきは、もう一度考え直されていいのではないか」と言うと、安部はアナキズムが文学と結びつきやすいものであると指摘している[36]。つまり、1950年代後半に非共産党系の左翼の間でアナキズム再評価の土壌が生成されていたというわけだ。

このように1960年代にアナキズム再評価の兆しが見られる中で、⑩安部公房「年譜」（『新鋭文学叢書2安部公房集』筑摩書房、1960年12月）が、安部のアナキズム理解の変遷を考える上で非常に重要なものになってくる。次に、安部が「満洲」での記憶について述べた箇所を引用する。

> 八月になって、急に戦争がおわった。ふいに、世界が光につつまれ、あらゆる可能性が一時にやって来たように思った。だが、つづいて、過酷な無政府状態がやってきた。しかしその無政府状態は、不安と恐怖の反面、ある夢を私にうえつけたこともまた事実である。父と、父に代表される財産や義務からの解放。階級や、人種差別の崩壊……[37]

安部自身によるこの「年譜」では、「無政府状態」が「不安と恐怖の反面、ある夢を私にうえつけた」とあり、「無政府状態」が肯定的に語られることになる。ここで重要なのは、前述した①座談会「二十代座談会　世紀の課題について」（『綜合

36) 前掲注14，p. 518.

37) 前掲注15，p. 465.

www.kci.go.kr

文化』1948年8月号）において、安部自身が「終戦後」の「満洲」について「完全な無政府で、強盗や人殺しが日中大通りでヒンピンと起き、しかも抵抗ができない」と否定的に述べていることにある[38]。すなわち、1948年の時点で安部は「無政府」という言葉を否定的に用いているのに対し、1960年の時点では、「階級や、人種差別の崩壊」という側面を持つものとして「無政府」を肯定的に捉えているのである。これは安部が日本共産党を除名される2年前のことであり、安部が共産主義には還元不可能な左翼思想を提示している点で注目に値する。

続いて、⑪座談会「新しい都市像を求めて」（『中央公論』1961年1月号）では、安部が建築学者、丹下健三（1913-2005年）など建築関連の評論家と「都市」の問題を討論しており、安部は「都市計画」において、「市民の主体的参加」がなければ、「資本のエゴイズムが別のアナーキズムを生みだすだけ」だと述べており、この時点では資本主義がもたらす「無秩序」として「アナーキズム」という言葉が否定的に用いられている[39]。むしろ「民主都市建設委員会」が市民を組織するべきだと述べている点で、安部の都市理解はまだマルクス主義的だと言ってもよいが、ここで重要なのは安部が「都市」と「アナキズム」を結びつけている点である。

その「都市」を舞台にした⑫長編小説『他人の顔』（講談社、1964年9月）では、「国家」が「民族」や「階級」、「人種」といった「～である」という「本質」を表象する「一つの巨大な仮面」であり、そのような「国家」にとって、「無政府主義者」は「世界でいちばん無害」であるとされている[40]。つまり、「民族」、「階級」、「人種」といった、あらゆる「本質」（essence）を括弧でくくって現象学的還元（phenomenological reduction）を行ったものとして「無政府主義」が規定されているのだ。このように、ここでは反本質主義的、すなわち実存主義（existentialism）なものとしてアナキズムが提示されている点で特筆すべきである

38) 前掲注6，p. 66.
39) 前掲注16，p. 20.
40) 前掲注17，p. 441.

www.kci.go.kr

が、この時点でのアナキズムはまだ「国家」にとっては「無害」なものとして表象されている[41]。

そのアナキズムが「都市」との関係で肯定的に論じられているのが、⑬安部公房「国家からの失踪」（『日本読書新聞』1967年11月20日付）である。

> また敗戦後の無政府状態を、ムチャクチャだったという人がいますが、実際はちがったな。これは悪い政府が入ってきた時にそうなるんで、都市というものは、日常的には平和そのものなんで、店はやっているし商品は売っているし自主性というのは貫かれていたと思うんだ。ところが、そのあと国民党がやってきた時、とたんに治安が悪化した。国家の機能というのは、低次元においては、停止していてもなんともない。むしろない方がいい、とその時痛感したわけです。コンミューンは、こういう状態で行われうるんだな。
>
> ともかく、国家からの逃亡は、権利として認められてしかるべきであり、国家にはそれをとどめる力がない。ぼくは逃亡を実体化することで、国家の機能の限界をはっきりさせていくべきだと考えているんです。[42]

このインタビューで安部は、自身が過ごした敗戦後の奉天における「無政府状態」では、「都市」は「平和そのもの」で、むしろ治安が悪化するのは「悪い政府」が入ってきたときだと述べている。波潟剛が述べるように、「この発言では「国家」と「都市」との比較が重要となっていく」のであり、「満洲という過去の記憶も、都市化社会の記憶へと塗り替えられている」と言ってもよい[43]。ここで重

---

41) 拙稿「安部公房「ミリタリィ・ルック」あるいは実存主義的アナキズム――短編小説「保護色」、三島由紀夫、ロラン・バルト――」（『九大日文』第25号、2015年3月）では、1960年代の安部が実存主義とアナキズムを結びつけた「実存主義的アナキズム」（existentialistic anarchism）を提示していたことを論じている。それは「「国家」や「役柄」、「本質」を現象学的還元し、還元不可能な「素顔」、「実存」を提示するもの」なのであった（p.131）。簡単に言えば、個人の主体性や自由を主張する実存主義の政治形態のひとつとして、日本共産党除名後の安部はアナキズムに向かったものと思われる。

42) 前掲注18, p.427.

43) 波潟剛（2005）「高度経済成長期の「アヴァンギャルド」――小説『砂の女』と安部公房」『越境のアヴァンギャルド』NTT出版、p.255.

www.kci.go.kr

要なのは、前述したように、1960年代後半に安部が「都市」を主題化していく以前の⑩安部公房「年譜」（『新鋭文学叢書2安部公房集』筑摩書房、1960年12月）の時点で、安部が「無政府状態」を肯定的に語っていることだ。このことは1960年の時点で安部がアナキズムに肯定的であったこと、そして1960年代後半にそのアナキズムを体現する空間として「都市」が見いだされたことを意味している。

これ以降、安部は奉天という「都市」での「無政府状態」を肯定する発言を、⑭安部公房・野坂昭如「無思想の逃亡者と実存的共和国」（『映画芸術』1968年2月号）や⑰安部公房「都市への回路」（『海』1978年4月号）、㉓安部公房「文学世界にテーマはいらない」（『日本経済新聞』1992年1月25日付）で度々述べている。しかし、苅部直が『安部公房の都市』で指摘するように、安部が作家活動を始めた時期から、敗戦後の奉天を「無政府状態」として肯定的に語っていたわけではない[44]。むしろ、安部は1967年の時点で、1960年代における「都市化」を踏まえ、「都市」における「国家からの失踪」をアナキズムとして捉えていたことになる。

この「国家からの失踪」が発表される1967年に、安部は石川淳（1899-1987年）、川端康成（1899-1972年）、三島由紀夫（1925-1970年）とともに左右を越えて文化大革命（1966-1977年）を批判する声明「文化大革命に関する声明」（『東京新聞』1967年3月1日付）を発表している。これは正統派の国家主義的なマルクス主義が自由な学問、芸術を抑圧していることへの批判となっており、安部のその後の国家主義批判に繋がるものである。⑮安部公房・針生一郎「ゴダールの可能性は何か」（『映画芸術1969年3月号）では、その文化大革命が「若い世代が中央集権のもとに結集した例」であり、決して「アナーキーな拡散」ではないと述べており[45]、ここでは「アナーキー」という言葉は「中央集権」とは対立するものとして提示されている。

1960年代、とくに1968年は学生運動が盛んになった時期でもあり、学生運動で

44) 苅部直（2012）「ある国家の経験」『安部公房の都市』講談社、p. 183.

45) 前掲注21，p. 262.

www.kci.go.kr

もアナキズムに近いセクトが現れるようになる[46]。⑯安部公房「根なし草の文学」（『波』 1969年9・10月号）においては、「いまの学生運動にはアナーキズムと結びつきやすい、反体制というよりむしろ反国家的な、日本人であることを拒否するという姿勢がある」とあり[47]、そのような学生運動に「反国家的」なアナキズムが見いだされ、それが当時の欧米での学生運動との共通点として示されている。このように、1962年の日本共産党除名以降、安部は1960年代の「都市化」、及び1967年における文化大革命批判の声明、1968八年における学生運動という時代の変化の中で、「国家」への批判を強めていくことになるのである。

3.3. 1980年代のバブル経済期における「カタストロフ」と「国家」

1980年に入ってからも、このような「アナキズム」が積極的に論じられている。1980年代は東側 / 西側の冷戦（Cold War, 1945-1989）のため核戦争の危機が迫って時期であり、多くの日本の小説やサブカルチャーにおいて「終末」や「終焉」の恐怖が描かれることになる。例えば、宮崎駿（1941年-）のアニメ映画『風の谷のナウシカ』（東映、1984年3月）では戦争によって荒廃した「腐海」の世界が描かれ、浅田彰（1957年-）・坂本龍一（1952年-）・Radical TVによるビデオ・アート『TV　WAR』（於・つくば万博、1985年9月）では科学の祭典であるはずのつくば万博において、ひたすら原爆と戦争の映像が流されている。

このような核戦争というカタストロフ（catastrophe）の危機を反映して、安部も核シェルターと人間の生存サヴァイバルを描いた『方舟さくら丸』（新潮社、1984年11月）を発表することになる[48]。安部の目には東側であろうが西側であろ

---

46) 当時の学生運動では、中核派と革マル派において、資本主義社会での疎外から回復するため、既存のマルクス主義（スターリン主義）ではなく実存主義やアナキズムが参考にされたという（小熊英二（2009）「セクト（下）」『1968〈上〉――若者たちの叛乱とその背景』新曜社、p. 263）。

47) 前掲注22, p. 355.

48) 李先胤『21世紀に安部公房を読む――水の暴力性と流動する世界』（勉誠出版、2016年7月）では、安部の『方舟さくら丸』におけるナショナリズムの問題が詳細に議論されており、『方舟さくら丸』が描く核シェルターという「自足的閉鎖系」が閉鎖的な「国家システム」の問題を扱っていることが論じられている（李先胤（2016）「裁きと排除の空間」『21世紀に安部公房を読む――水の暴力性と流動する世界』勉誠出版、p. 177）。

うが、それが「国家」であることに変わりはなく、むしろそのような「国家」は廃棄すべきものであっただろう。⑱安部公房「〈安部公房が若者に与える〝予感的〟メッセージ〉」（『週刊プレイボーイ』1980年2月26日号）では、「アナーキーで個人的」な「反抗」を若者に勧めている[49]。そして、安部公房「反教育論――'86東京国際円卓会議基調報告」（国際平和記念'86東京国際円卓会議、於・経団連会館国際会議場、1986年9月25日）では、安部は自身が「国家」の廃棄を目指す「アナキズム」と東側 / 西側の冷戦を前にした「ニヒリズム」の間で揺れ動いていると述べている[50]。

アナキストの石川淳が1987年12月に亡くなると、安部は⑳安部公房「弔辞――石川淳」（『すばる 臨時増刊石川淳追悼記念号』1988年4月）、㉑安部公房「石川淳の編上靴」（『新潮』1988年5月号）において石川を悼む文章を書いているが、ここで重要なのは、安部が自身と石川の共通点をアナキストであることに求めていることだろう。

1980年代は1960年代の場合と同じく、安部がアナキズムに言及することの多い時代であった。例えば、㉒安部公房「〈歴史に学ぶべからず〉」（『エスクァイア 日本版』1991年11月号）においては、自身の長編小説『榎本武揚』（中央公論社、1965年7月）を振り返り、榎本武揚（1836-1908年）のことを「今風に言えば、胡散臭いアナーキスト」であると述べている[51]。

1960年代と1980年代に共通するのは、高度経済成長（1954-1973年）、及びバブル景気（1986-1991年）といった資本主義の発達が起きた時期であり、従って多国籍企業が海外進出を行っていた時期だということだ。柄谷行人（1941年-）が言うように、ジル・ドゥルーズ（Gilles Deleuze, 1925-1995）とフェリックス・ガタリ（Pierre-Félix Guattari, 1930-1992）による共著『千のプラトー』（*Mille Plateaux*, 1980）における「ノマドロジー」（nomadologie）すなわち遊

49) 前掲注25, p. 41.
50) 前掲注26, p. 317.
51) 前掲注29, p. 204.

www.kci.go.kr

牧民論＝「アナキズム」は「国境を越え、ネーション、さらに企業共同体を越えるものであった」ため「ラディカルに見えた」が「企業にも歓迎される思想であった」[52]。1980年代に安部が残したメモには、次のようにある。

☆　産業社会の無国籍性は、自己の利益のためにナショナリズムを再生産しつづける。

小説の無国籍性はナショナリズムに抗議しつづける。

ナショナリズムはいかなる場合にも、現代小説に対して抑圧的に機能する。[53]

ここで安部の「アナキズム」における「無国籍性」を、「産業社会」の「無国籍性」と対比し、安部の「アナキズム」を「国家」と「資本」の両方に対する批判として定義することができるだろう。

4. おわりに

以上のような「アナキズム」が前景化し始めた時期として、1960年代は安部にとって特に重要な時代だと言えるだろう。「根なし草」や「無国籍」と呼ばれる安部の作品には、「根なし草」や「無国籍」としての政治性があったはずである。安部が実際に「アナキズム」という言葉を用いて自身の政治性を提示している点で、それはコスモポリタニズム（cosmopolitanism）とは差異化されて理解されねばならない問題である。

このように日本共産党を擁護してきた従来の左翼知識人が、1960年代前後に非共産党系の左翼として言論活動を行うようになることは、何も安部に限った事ではない。例えば、戦後民主主義の評論家で医師の松田道雄（1908-1998年）は、

www.kci.go.kr

52) 柄谷行人（2014）「二種類の遊動性」『遊動論――柳田国男と山人』文芸春秋、p. 192.

53) 安部公房（2000）「講演メモ――伝統と変容」『安部公房全集』第27巻、新潮社、p. 143.

ソ連によるハンガリー動乱（1956年10-11月）への武力介入に対して失望を感じてアナキズムに接近し[54]、『現代思想体系　第16巻　アナーキズム』（筑摩書房、1963年10月）を発表している。このような経緯は1956年の東欧旅行を境にして日本共産党への懐疑を深めていった安部の場合と同じようなものだったに違いあるまい。1960年代後半に安部のアナキズムに関する言説が生成された背景には、同時代のアナキズムや戦後民主主義、学生運動との連動する性格があったことが示唆されるのだ。

以上のような安部のアナキズムへの接近を考察する上で重要になってくるのが、安部が戦後のアヴァンギャルド芸術集団「夜の会」や新日本文学会などで師事した評論家、花田清輝（1909-1974年）との関係だろう。安部 / 花田の政治的対照性が顕在化するのは、文化大革命においてであった。前述したように、安部は石川淳、川端康成、三島由紀夫らとともに『東京新聞』1967年3月1日付に「文化大革命に関する声明」を発表したのであり、このことは文化大革命を支持していた新日本文学会との決裂を意味していた。このように、安部は文化大革命をきっかけにして、花田清輝に代表される正統派のマルクス主義から離れていくことになるのだった[55]。従って、1960年代に安部がアナキズムに接近することは、これまで安部自身が所属していた旧左翼のグループからの離脱、及び同時代の戦後民主主義や学生運動に代表される新左翼への接近として理解されうる。

こういったアナキズムの視座をとおして安部の文学テクストを読むことで、どのような読解可能性が開示されるだろうか。安部がアナキズムに直接言及したのは、エッセイやインタビューにおいてであり、安部のアナキズムは文学テクストの中では直接的に言及されずとも潜在していると言ってもよい。そこで重要になってくるのが、前述した長編小説『他人の顔』における実存主義とアナキズムの関係

54) 河合蘭（2015）「松田道雄――母親たちとともに」、栗原彬『ひとびとの精神史 第3巻 六〇年安保――1960年前後』岩波書店、pp. 329-331.

55) 安部が文化大革命を境にして花田清輝らの新日本文学会から離れていく経緯や、同時代の「正統」なマルクス主義／「異端」のアナキズムの関係については、拙稿「進化論・異端・アナキズム――安部公房「異端のパスポート」とスタンリー・キューブリック『2001年宇宙の旅』――」（松本常彦、波潟剛編『近現代文学と東アジア――教育と研究の多様性に向けて』花書院、2016年3月）を参照（p. 218）。

性だろう。すなわち、安部は「民族」や「階級」、「人種」といった「本質」には還元不可能な「実存」を提示する際に「無政府主義者」という言葉を用いていたのである。この時、安部の言う「無政府主義者」は「実存主義者」と等価のものだと言ってもよい。『他人の顔』以降、安部は『燃えつきた地図』や『箱男』（新潮社、1973年3月）などで都市空間における孤独な個人を描いていくことになるが、このような個人の「実存」はいかにアナキズムと共鳴しているのだろうか。このような具体的な文学テクストにおけるアナキズムの問題については、安部の多種多様なメディア（小説や映画、演劇など）における文学活動を踏まえながら、更なる個別的な研究が必要となるだろう。

本研究では、安部がどのようにアナキズムを評価していたのか、その用例を収集し、データベース化することで、安部のアナキズム理解の変遷を解明することができた。こういった新たな視座から、今後も安部公房研究が刷新されていくことが望まれるであろう。

【参考文献】

安部公房（1997）「芸術を大衆の手へ」『安部公房全集』第2巻、新潮社、p. 203.
_____（1997）「地図の地図――二十世紀文学の潮流」『安部公房全集』第4巻、新潮社、p. 287.
_____（1998）『裁かれる記録――映画芸術論』『安部公房全集』第8巻、新潮社、p. 132.
_____（1998）『東欧を行く――ハンガリア問題の背景』『安部公房全集』第7巻、新潮社、pp. 65，73.
_____（1998）「道――トラックとともに六〇〇キロ」『安部公房全集』第7巻、新潮社、p. 371.
_____（1998）「年譜――『新鋭文学叢書』に寄せて」『安部公房全集』第12巻、新潮社、p. 465.
_____（1999）「国家からの失踪」『安部公房全集』第21巻、新潮社、p. 427.
_____（1999）『他人の顔［講談社版］』『安部公房全集』第18巻、新潮社、p. 441.
_____（1999）「都市への回路」『安部公房全集』第26巻、新潮社、pp. 224，226.
_____（1999）「根なし草の文学」『安部公房全集』第22巻、新潮社、p. 355.
_____（2000）「〈安部公房が若者に与える〝予感的〟メッセージ〉」『安部公房全集』第27巻、新潮社、p. 41.
_____（2000）「石川淳の編上靴」『安部公房全集』第28巻、新潮社、p. 383.
_____（2000）「講演メモ――伝統と変容」『安部公房全集』第27巻、新潮社、p. 143.
_____（2000）「弔辞――石川淳」『安部公房全集』第28巻、新潮社、p. 378.
_____（2000）「反教育論――'86東京国際円卓会議基調報告」『安部公房全集』第28巻、新潮社、p. 317.

www.kci.go.kr

_____（2000）「文学作品にテーマはいらない」『安部公房全集』第29巻、新潮社、p. 246.
_____（2000）「〈歴史に学ぶべからず〉」『安部公房全集』第29巻、新潮社、p. 204.
安部公房、川添登、菊竹清訓他（1998）「新しい都市像を求めて」（『安部公房全集』第15巻、新潮社、p. 20.
安部公房、佐々木基一（1998）「良識による共犯」『安部公房全集』第9巻、新潮社、p. 339.
安部公房、野坂昭如（1999）「無思想の逃亡者と実存的共和国」『安部公房全集』第22巻、新潮社、pp. 11，14.
安部公房、針生一郎（1999）「ゴダールの可能性は何か」『安部公房全集』第22巻、新潮社、p. 262.
李先胤（2016）「裁きと排除の空間」『21世紀に安部公房を読む――水の暴力性と流動する世界』勉誠出版、p. 177.
上野光平、小林明、関根弘他（1997）「二十代座談会 世紀の課題について」『安部公房全集』第2巻、新潮社、p. 66.
大場健司（2015）「安部公房「ミリタリィ・ルック」あるいは実存主義的アナキズム――短編小説「保護色」、三島由紀夫、ロラン・バルト――」『九大日文』第25号、p. 131.
_____（2016）「進化論・異端・アナキズム――安部公房「異端のパスポート」とスタンリー・キューブリック『2001年宇宙の旅』――」、松本常彦、波潟剛編『近現代文学と東アジア―教育と研究の多様性に向けて』花書院、pp. 218. 221.
小熊英二（2009）「セクト（下）」『1968〈上〉――若者たちの叛乱とその背景』新曜社、p. 263.
柄谷行人（2014）「二種類の遊動性」『遊動論――柳田国男と山人』文芸春秋、p. 192.
苅部直（2012）「ある国家の経験」『安部公房の都市』講談社、p. 183.
河合蘭（2015）「松田道雄――母親たちとともに」、栗原彬『ひとびとの精神史 第3巻 六〇年安保――1960年前後』岩波書店、pp. 329-331.
木村陽子（2013）「マルチメディア演劇への道」『安部公房とはだれか』笠間書院、p. 104.
坂堅太（2016）「「複雑」なナショナリズム――「国民文学」を巡る問題」『安部公房と「日本」――植民地／占領経験とナショナリズム』和泉書院、p. 30.
鳥羽耕史（2007）「プロローグ」『運動体・安部公房』一葉社、p. 6.
_____（2007）「視覚の手触りへ――『砂の女』1962」『運動体・安部公房』一葉社、pp. 278-279.
波潟剛（2005）「高度経済成長期の「アヴァンギャルド」――小説『砂の女』と安部公房」『越境のアヴァンギャルド』NTT出版、p. 255.
平野謙、大江健三郎、安部公房他（2000）「文学者と政治的状況」『安部公房全集』第29巻、新潮社、p. 518.

논문 투고 일자 : 2018. 12. 29.
논문 심사 일자 : 2019. 01. 31.
게재 확정 일자 : 2019. 02. 01.

www.kci.go.kr

<要旨>

安部公房、その政治性の変遷
―『安部公房全集』全30巻におけるアナキズム関連用例データベース作成とその分析―

大場健司

近年の安部公房（1924-1993年）研究では、1950年代の作品に焦点が当てられることが多く、それは日本共産党員としての作家像を前景化することと同義であった。しかしながら、安部が1960年代に日本共産党から除名されると、マルクス主義には還元されえない政治性を持つ作品を発表していくことになる。そこで本研究では、安部がアナキズムに関していかなる評価を与えてきたかを同時代言説との関係から解明していく。

On Abe Kōbō and the Differentiation of His Politics: A Database Analysis of Discourses on Anarchism in *Complete Works of Abe Kōbō* of 30 Volumes

Oba, Kenji

Recent previous studies on Abe Kōbō (1924-1993) tend to argue about the works written by Abe in the 1950s Japan. This means that such previous studies paid attention to Abe as a writer of Japan Communist Party. However, after the expulsion from the party, Abe wrote works under the influence of anarchism, which cannot be reduced into Marxism. Hence, This study focuses the relationship between his anarchism and social context at the time.

www.kci.go.kr